

「エコシティたかつ」推進フォーラム 「～たかつでつながる・生きものの輪と防災まちづくり～」開催結果

■日 時：平成 24 年 12 月 2 日（日） 13:30～15:30

■場 所：高津区役所 1 階 市民ホール

保健ホールにて「エコシティたかつ」や区内小学校でビオトープを活用した授業の
成果物、市民活動団体の環境の取り組みを展示

■主 催：「エコシティたかつ」推進会議、川崎市高津区役所

■来場者数：約 100 名

■プログラム

【第一部】学校ビオトープ交流会

児童による区内の小学校にあるビオトープを活用した学習の発表

●発表校：梶ヶ谷小学校、末長小学校、橘小学校、久本小学校

●講評：岸 由二委員長（「エコシティたかつ」推進会議・慶應義塾大学経済学部教授）

【第二部】講演：「東日本大震災からの復興まちづくり」大船渡市綾里地区の支援を中心に

●講師：饗庭 伸氏（首都大学東京 都市環境学部准教授）



■推進フォーラム概要

1 【第一部】学校ビオトープ交流会

（1）梶ヶ谷小学校 3 年生の発表

春・夏・秋と季節に応じたビオトープと学習した生きものの変化について発表。

【会場からの感想（抜粋）】

- ・春・夏・秋と観察を行ってビオトープの様子を知るとはとても大切なことだと思いました。
また、発表会に参加して、私の学校以外の学校のビオトープについて詳しく知ることができました。学んだことをこれからのビオトープ活動に活かしていきたいと思いました。（橘小学校児童）
- ・観察の視点が鋭く、ビオトープの生き物を見つかったり、生き物の精密な絵も描いていたりとても素晴らしいと思った。今回、ビオトープの発表を通じて児童同士のつながりというもの生まれたが、生き物もビオトープを介してつながっていると思っている。梶ヶ谷小学校のヤゴがトンボになって、他の小学校に行くような環境が整備していけるのではないかなと思っている。今後は、勉強だけでなくビオトープもしっかりと守って欲しいと思う。（秋岡区長）

（2）末長小学校 理科委員会（5 年生・6 年生）の発表

ビオトープを新たに整備し、これから作っていく取り組みとビオトープができることで変化する周辺環境について学習した内容を発表。

【会場からの感想（抜粋）】

- ・自分たちでビオトープの池を作って、より良いビオトープにしようと努力していて、良いなと思いました。また、学内にポスターを貼って低学年にもわかってもらうようにしているのも良い取り組みだと思いました。(久本小学校児童)
- ・ビオトープを作るところからやっているのが羨ましいと思った。これから植物も大きくなっていくとビオトープに集まってくる生きものも増えてくると思う。皆さんは卒業してしまうが、卒業後も小学校に戻って自分たちが作ったものがどうなったのかを見に行くと楽しくなると思う。(「エコシティたかつ」推進会議 田中委員)

(3) 橘小学校 5年生の発表

ビオトープについてその役割や学習の内容を発表。

【会場からの感想(抜粋)】

- ・田んぼとビオトープがつながっていることにびっくりしました。(梶ヶ谷小学校児童)
- ・今日はどんな発表をされるのかと、ワクワクして来た。本当によくまとまっていて、立派な発表だったと思う。

私は、橘小学校付近の高津区市民健康の森で日々、活動を行っている、橘小学校の皆さんは、以前から蛍の飼育などの取り組みをして来ているが、今日の発表を聞いて学ぶことの大切さ、続けることの大切さ、自然を守ることの大切さを教えて頂いた。これからは是非継続して欲しい。(「エコシティたかつ」推進会議 山田委員)

(4) 久本小学校 5年生の発表

ペンギン池と呼ばれるビオトープとそれを活かした学習と身近な自然環境を学ぶ取り組みについて発表。

【会場からの感想(抜粋)】

- ・ビオトープを利用してクロメダカの実験をしたり、八ヶ岳の自然環境で学んだことを踏まえて小学校のビオトープを考えたりしていることが、すごいと思いました。(末長小学校児童)
- ・きちんと目的を持って学習に取り組んでいる様子が良く分かった。そして、生きものの住みやすい環境を皆さんが考えて継続的に観察している点に感動した。継続した観察は、その次につながると思う。

もう一つは八ヶ岳の生態系と比較しながら、今自分たちができること、自分たちが安心して生活できる環境を考えていることが素晴らしいと思った。

本日発表のあった小学校の皆さんは、それぞれが自分のことだけでなく、先につなげていく発表をしていたと思う。(高津区役所子ども支援室 三ツ木室長)



(5) 表彰

「エコシティたかつ」推進会議 岸委員長より表彰とプレゼントの贈呈。

(6) 岸委員長より講評

元気に良い発表をして頂いてありがたく思う。今後ビオトープをどう利用していったらよいかということと話したいと思う。今日は、3年生の発表が一組だけだったが、生きものに対する感覚は3年生から4年生にかけて大きく変わる。「気持ち悪い・かわいい」という素直な感覚を持ってビオトープの生きものに触れる機会をもってもらいたい。

今日皆さんが発表してくれたのは「池のビオトープ」という。日本は一時期、「池のビオトープ」をたくさん作ったので、ビオトープというと池をイメージするようになったが、ビオトープは生きものの住む場所を指すので、池だけではない。「池のビオトープ」は作ると、空を飛んで色々な生き物が集まってくるので、とても面白い。どんな工夫をするとお客さん(色々な生き物)が集まってくるのかを考えていって欲しい。

今日発表してくれた学校のビオトープの水は雨水を使ったものと、湧水を使ったものがあった。このプロジェクトについて、高津区では「学校ビオトープ」と呼ばずに、「学校流域」と呼んでいる。雨が降ると水が谷に流れる台地の基本構造を「流域」と呼んでいて、そこで水循環を考えている。雨水を溜めると学校のビオトープなどに使える。

また、ビオトープは、池の他に草や森のビオトープがある。どのような草や木を植えたら、どのような生きものが来るか、まだまだやれることは、たくさんある。そういうことを是非これからも考えて楽しく学んでいって欲しい。

2 【第二部】講演：「東日本大震災からの復興まちづくり」大船渡市綾里地区の支援を中心に

首都大学東京の饗庭 伸氏から地形を意識した東日本大震災の復興の取り組みについて発表があった。

現在、大船渡市役所の主導で復興計画を作っており、その過程で住民のワークショップがあった。しかし、大船渡市自体が非常に大きな自治体のため、各地区について細かい計画が立てられたわけではなく、また、計画と平行して地元では復興委員会が立ち上がっており、地元の要望をまとめて行政とのやり取りを続けていた。皆非常に熱心であるため、様々な意見が出て、具体的な計画がまとまらないので、専門家の話を聞きたいという要望があがり、私に依頼していただいた。

具体的には、先ず地形模型を持って行った。そうするとたくさんの人が集まり、色々な話が出てきた。他



には、個別に話を聞いていかないとまとまらない部分もあったので、地元で 10 名ほどの方を選出させていただいて地震前の生業や今後の復興について話を伺った。また、幅広く住民の意見を聞くために、大きな地図を用意して地区の方に話を聞くことも行った。さらに、集められた情報をニュースにして発信してきた。今年の 5 月の連休から現地に入って、ワークショップ 2 週間に 1 回ほどを進めてきた。そして、いくつかの集落に関しては地区計画案のたたき台が見えてきた。



ワークショップの様子（スライドより）

【事例（抜粋）：小石浜地区】

（１）震災直後の状況

- ・浸水ラインの内側で家屋等が少し流されただけで、亡くなられた方は一人もいない。また、家屋は無事だったが、ライフラインが 2 ヶ月ほど止まってしまった。

（２）計画案のたたき台

- ・地域に入る前に岩手県で、11m の防潮堤を沿岸に建設するということが決まっていた。この地域は過去に津波の被害も受けていたため、地域の住民も防潮堤が建設されること自体に反対はなかった。しかし、防潮堤をどう作るかという議論だけを進めてきており、防潮堤の入り口の数について、住民と県では、議論があったようだ。
- ・防潮堤の入り口と道路を決める際に「逃げ地図」という地図を作成した。これは浸水ラインと道路の交わったところに印を付け、浸水ラインの内側にいる方々がその印まで辿り着ければ生き延びられるというものを示した地図となる。その後、印から浸水ラインの内側に向かって 3 分間でどのくらいの距離を歩けるのかを色分けした。この「逃げ地図」により地域のリスクを視覚化し、計画案を取りまとめた。
- ・次に、集落から普段仕事をしている港までの道のりを同じように入りが 1 か所の場合と 2 か所の場合で色分けしていった。この結果、入りが 2 か所あってもほとんど変化がなかったため、入り口は 1 か所でも良いということが分かった。
- ・11m の防潮堤の建設は了承していたが、研究室の学生が完成イメージを作って見せたところ、後悔の声が上がった。コンクリートむき出しでは、圧迫感があるので、そうならないデザインを決めるワークショップを行い、その場で学生がパソコンで作業しながら防潮堤のデザインを決めていった。これが良いのか悪いのか議論はあるが、こうしたツールを利用していくとしっかりと話がまとまっていくということが分かった。

地元でしっかりと話し合いをすると、東京の人たちが考えているものよりもはるかに良い案が出てくる。今後、復興の計画を実現していく過程で、細かい話も出てくるが、一つ一つ丁寧に取り組んでいきたいと思っている。

岩手県と東京都の年間所得の平均を比較してみると 170 万円ほど違うにも関わらず、現地では東京都同じように豊かな生活を送れている。これは、農業や漁業など自然と都市との関係、地域でお互いに支えあうコミュニティが成立していたことが大きいと思う。しかし、震

災によってその関係性が壊れてしまった。震災前では身寄りがいない方が地域や自然との関係の中で支えられて生きてこられたのが、震災以後その関係性がなくなり、生活していくことに困難な状況にある。これからの復興まちづくりは、その関係性の修復を考慮に入れながら進めていく必要があるだろう。

3 本日のまとめ 「エコシティたかつ」推進会議 岸委員長

都市計画を策定にあたって、先ず土地利用の計画を行う。被災地の多くはおそらく都市計画区域がかかっていないと思う。これはある意味でも幸いなことだ。都市計画区域を当てはめると、現在の国法は地形を参照する必要がない。気仙沼付近の地域などは都市計画区域がかかっているので、地形を無視して住宅が建つのではないかと心配している。何はともあれ、地形を参照するための地形図を作るというのはとても重要なことだ。

もう一点重要なこととして、これから 50 年、100 年先を考える復興と銘打っているのに、豪雨や洪水による海面の上昇を考慮されていない。これを考慮しないで長期計画を立ててよいのか疑問である。今回、津波があつて安全だった高台も豪雨になり、洪水があれば大きな被害を受ける可能性がある。もっと恐ろしいのは津波に対する防潮堤や防潮林をつくろうと計画しているが、専用のソフトを見てみると気仙沼付近は事実上海抜ゼロメートルに近い。温暖化が一番深刻に進むと海面が 100 年後数メートルから最大 5 メートル上がると言われている。それを勘案すると、私に復興計画の相談のあった地域は全て水没してしまう可能性がある。

「エコシティたかつ」は今ある問題に対応するために 100 年先と言っているのではない。生物多様性や豪雨の被害は 100 年後もおおよそ検討がついている。それに対して、まちづくりを考えたときに、流域ということで考えておかないといけない。豪雨が突然ひどくなったときに、それから考えたのでは遅い。そのため、「学校流域プロジェクト」や「水と緑の探検隊」で練習していきたいと考えている。

4 【「エコシティたかつ」の取り組み・市民プロジェクト・学校流域プロジェクトのパネル展示の様子】



以上